■フェニーチェ劇場にてオペラとダンスの新作を発表　2010年3月

勅使川原三郎はイタリアのフェニーチェ劇場の依頼を受け、オペラ作品の演出と、新作ダンス作品を３月１４日～２１日の５日間上演しました。会場は連日満席、大喝采で、新しいものに対して保守的だとも言われるベニスの観客や評論家からも大変高い評価を受けました。
ベニスの中心に位置するフェニーチェ劇場はロッシーニやベッリーニ、ヴェルディなどの数々の名作が初演された世界有数のオペラ劇場で、現在のオペラ・シーンにおいても重要拠点の一つです。この劇場でオペラを演出するのは、日本人では勅使川原が初めてです。
今回上演したのは、ヘンリー・パーセル(Henry Purcell)作曲のオペラ「ディドとエネアス」(Dido and Aeneas)と、現代音楽の作曲家ブルーノ・マデルナ(Bruno Maderna)のミュージック・コンクレート作品「ル・リール」(Le Rire)に振り付けた新作ダンス作品でした。
両作品は、地元のメディアからも非常に高い評価を受けました。１７世紀に書かれたオペラが２１世紀の先端芸術として生まれ変わり、光と空間、ダンスと音楽の斬新でメタフィジカルな構成は、オペラという総合芸術の未来的なヴィジョンを提示しました。それにも関わらず、保守的なベニスのオペラ・ファンがこの作品を絶賛したのは、そこにパーセルの音楽の美が、これまでに経験したことがないくらいの高い純度で抽出され視覚化されていたからにほかなりません。
多くの新聞や雑誌に、公演評やインタビュー記事などが掲載されましたので、写真と共に皆様にいち早くご覧いただきたく、一部記事抜粋をご紹介させていただきたいと思います。

ダンス作品「ル・リール」

オペラ「ディドとエネアス」　Photo by Michele Crosera

記事抜粋訳

<u>イル　ガゼッティーノ紙</u>
マリオ　メッシーニ氏 （元フェニーチェ劇場総監督、現音楽評論家）
（**Il GAZZETTINO , Mario Messinis**）

“舞台は気高い芸術家勅使川原三郎によって、すばらしく美しい表現になった。
ベニスの観客たちはブルーノ・マデルナ作曲による「ル・リール」から発せられる輝く光に魅了された。それは人々の記憶に永く残り続けることだろう。この素晴らしい視覚芸術は、ダンスの世界において規範となるべきものである。
「ディドとエネアス」は身体の動きと光の魔術によって創造された輝かしい作品であり、大成功をおさめた。”

<u>イル・マッティノ・ラ・トゥリブナ・ラ・ヌオヴァ紙</u>
ミルコ　スキピリッティ氏
(il mattino la tribuna la Nuova , Mirko Schipilliti)

“形と表現が極限まで磨き抜かれた作品。素晴らしい成果だ。”

<u>ダッティ・デッロ・スペッターコロ紙</u>
イラリア　ベリーニ氏
(Dati Dello Spettacolo, Ilaria Bellini)

“素晴らしく刺激的なダンスと音楽の融合
極めて質の高いこの作品は、滅多に経験することができないほど完璧なものであった。”

<u>フランクフルター・アルゲマイネ紙</u>
(Frankfurter Allgemeine)

“ダンスの激しい回転と身体の振動、そして音楽の双方が互いに共振し導きだされ、それによって舞台はさらに素晴らしく情熱的な作品になった。多くの人が共感できる作品だ。”

公演データ：

<u>ル・リール (Le Rire)</u>

振付・美術・照明・衣装：勅使川原三郎
作曲：ブルーノ・マデルナ (Bruno Maderna)
ダンサー：勅使川原三郎、佐東利穂子、鰐川枝里、加見理一、ケティング菜々、ケティングナイル
上演時間：１６分

<u>ディドとエネアス (Dido and Aeneas)</u>

演出・振付・美術・照明・衣装：勅使川原三郎
指揮者：アッティリオ・クレモネージ (Attilio Cremonesi)
作曲：ヘンリー・パーセル (Henry Purcell)
歌手：ディド ：アン・ハレンバーグ(Ann Hallenberg)
　　ベリンダ：マリア・グラツィア・スキアーヴォ (Maria Grazia Schiavo)
　　エネアス：マーリン・ミラー (Marlin Miller)
　　コーラス：フェニーチェ歌劇団　　ほか
ダンサー：勅使川原三郎、佐東利穂子、川村美恵、鰐川枝里、加見理一、
　　高木花文、ケティング菜々、ケティングナイル
上演時間：６０分

■勅使川原三郎が第４回日本ダンスフォーラム賞大賞を受賞　２０１０年３月

フェニーチェ公演からの帰国後、３月３１日に勅使川原三郎は昨年度の活動に対して、第４回日本ダンスフォーラム賞大賞を受賞しました。
ダンスフォーラム賞とは、その年１年間において優れた作品を生み出したことを賞賛するだけではなく、作品に含まれる批評性の提示と、新たな表現価値の創造に対する振付家への賞です。今回、勅使川原は日本で発表した２つの新作「ダブル・サイレンスー沈黙の分身」「鏡と音楽」に加え、佐東利穂子のソロ「SHEー彼女」へのディレクションに対する総評価として大賞に選ばれました。
また現在、勅使川原の振付助手を務め、ソリストとしても世界的に高い評価を受けている佐東利穂子も２００７年に第２回日本ダンスフォーラム賞を受賞しております。

以下、今回の勅使川原の受賞における川崎徹氏、尼ヶ崎彬氏、石井達朗氏、立木燁子氏のコメントの抜粋を紹です。

川崎　徹　氏（２００９年　選考委員長）
「我々の目に狂いはない！と確信を込めて大賞に推された勅使川原三郎は、圧倒的な主観の暴走と、それを制御する精緻な客観を備えたダンスを長年に渡り作り、踊り続けている。その独自で孤高のクリエーションは突出しており、観る者の心をゆさぶり、時に不安にし、時に幸せにし、時に深い沈黙の贅沢を味わせてくれる。こうした超ハイレベルの作品を世に問い続ける彼の力量と、その過程に伴う諸々の困難をも作品の力としてくり込んでしまう粘り強い作業に対して、我々は最大級の評価をした。」

尼ヶ崎　彬　氏
「勅使川原三郎がいままで JaDaFo 賞の対象とならなかったのは作品の水準に問題があったからではない。村上春樹に芥川賞を与えるようなもので、いまさらそんなものは意味がないし、むしろ失礼ではないかというためらいの空気が選考会にあったからだ。けれども今年の選考会は違っていた。はじめから勅使川原しかないという空気ができあがっていた。それほど２００９年の彼の業績は突出していたのだ。（中略）これらを通じて私たちが驚いたことを二つだけあげておこう。一つは紫綬褒章まで受けて功成り名遂げたといってよい芸術家が、いまだに冒険の最前線で作品の新しい作り方を追求していることである。もう一つはダンサーとしての彼の身体が、加齢とともに衰えるどころか武道家のようにますます強靭の度を増していることである。まさに希有の舞踊家といってよい。（中略）問題は次の世代である。さいわい勅使川原は若い才能を発掘し、育てることにいま強い関心があるようだ。次はその成果を楽しみに待ちたい。」

石井　達朗　氏
「彼の最近作の充実度には驚かされる。円熟などというものから遠いところに身を置き、挑戦と実験から新しいものを創造する。」

立木　燁子　氏
「２００９年度の回顧では(＝も)、文句無く勅使川原三郎の活躍が印象に残る。（中略）この作品※では、音と無音、沈黙の世界を舞踊的回路から探っている。沈黙を身体的にとらえ、そのなかに命や存在の証を浮上させた。９月には知的な考察と視覚的遊びが交錯した秀作『鏡と音楽』を発表。その表現の革新性と深みに魅了される。そこに、舞踊の第一線を牽引してきた気概と自負が漲る。」

（※作品『ダブル・サイレンスー沈黙の分身』のこと）

■「オブセッション」東京・兵庫・マルセイユ公演　2010年5月〜6月

「オブセッション」は、２００９年５月、北フランス・サンブリューのロック・フェスティバルで初演した後、ギリシアやウィーンでも熱狂的に支持されてきた作品ですが、待望の日本公演がこの５月・６月に実現しました。（５月２０日〜２３日/東京・Bunkamura シアターコクーン、６月５日/兵庫県立芸術文化センター　阪急中ホール）
この作品は、ルイス・ブニュエルとサルバドール・ダリによるアヴァンギャルド映画の傑作「アンダルシアの犬」（１９２８）から勅使川原が着想し、“男女の不可能な愛の在り方”を描いた作品で、勅使川原三郎と佐東利穂子という類稀な２人のダンサーによる初の本格的なデュエットです。特に今回の東京公演では、勅使川原にとってこの作品のもうひとつのインスピレーション源であったヴァイオリニスト、ファニー・クラマジランとの共演が実現し、イザイの「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ」を生演奏で踊ることができました。
この公演は「パフォーミング・アーツの神髄」など高い評価をいただき、またＮＨＫ－ＢＳでも２度にわたって放送され、大きな反響を呼びました。
ファニー・クラマジランが参加した生演奏バージョンは、６月にもフランスのマルセイユで公演され、大成功をおさめました。今後も多くの海外公演が予定されています。

［記事抜粋］

ダンスが音楽の視覚化ではなく、演奏がダンスの伴奏でもない。音と動きが不即不離の関係を保ちながら共振する。まさに時間芸術でもあるパフォーミングアーツの神髄を見る思いだった。

読売新聞　2010年6月8日　堤広志

どうしても触れられない解決なき焦燥。そして壊れてゆくものと蘇生するもの。優れた作者はその先の時間を、人間の摂理よりも、もっと大きな宇宙の循環哲理に託しているのだろうか。

東京新聞　2010年5月26日　福田一平

ダンサーの身体とヴァイオリンの音色が舞台に生み出す情念は、誰か特定の人物に帰属されるべき感情とも、特定のストーリーによって説明される気持ちとも無縁だ。（中略）「オブセッション」に観客が見て取るのは、舞台を満たし、観客におよび、すべてを包み込む、いわば純粋情念の炎である。

ダンスマガジン　2010年7月号　貫成人

Photos by Masahiko Yakou

■「ミロク」NYリンカーンセンター公演　2010年4月〜7月

「オブセッション」の東京、兵庫、マルセイユでの公演を終えた勅使川原三郎と佐東利穂子は、７月初旬、１ヶ月以上にわたる海外ツアーに旅発ちました。
最初の到着地はニューヨーク。**リンカーンセンターでの「ミロク」**公演です。
勅使川原三郎のソロ作品「ミロク」は、２００７年東京で初演の後、フランスのモンペリエ、マルセイユ、パリ、トゥールーズ、タルブ、イタリアのレッジオ・エミリアなどで巡演、今年の４月中旬より北米に上陸しコロンバス、ミネアポリス、オタワ、モントリオールでも大変な人気を博しましたが、北米公演の最後を締めくくるのがニューヨーク・カルチャーの中心拠点リンカーンセンターでした（７月８〜１０日）。ニューヨークでは前回公演して大評判だった「ボーンズ・イン・ページズ」からすでに４年以上経っていることもあり、会場は開演前から勅使川原の新作に対する熱い期待に包まれていました。
主催であるリンカーンセンターのディレクター、ナイジェル・レデン氏は勅使川原のダンスについて、次のように語っています。
「彼のダンスは唯一無二の独自性を持っている。もはやダンスという枠さえも超えた、まさに総合的なビジュアルアートといえるだろう。同時に彼は傑出したダンサーでもあり、その動きが作り出す密度は強烈だ。未だかつてそのようなダンスを私は見たことがない。」
公演は３回とも超満員、終演後も熱狂的な拍手と歓声が鳴り止みませんでした。
「ミロク」の感動をアメリカの新聞は次のように伝えています。

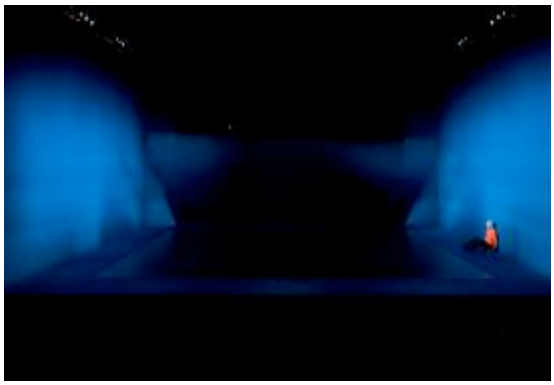
［記事抜粋］

「ダンスで重要なことは、生きているかどうかだ」と勅使川原は語る。しかし、ミロクの力が満ち引きする時空で、勅使川原は生きていることさえも遥かに超えた、触れることさえできない存在であった。私たちには霊そのものに触れることなどできないからだ。

ニューヨーク・タイムズ紙　　ギア・コールラス

勅使川原は、周囲に脈動する見えない力によって、腕や胴体を海藻のように漂わせ、自在に浮遊していた。絶え間なく変化し続ける光と音楽、響き続ける音響、そして光の柱が観るものを魅了し、アーティストを完璧に巻き込みながらも完璧に存在させる、絶対的な空間感覚を創造した。(中略)
勅使川原の「ミロク」は、光、音、そして言うまでもなく身体の動きによって未知の時空を切り開く。しかし、最も驚くべきことは、舞台上にはたった一人のアーティストがただ独りで踊っているという事実、そしてこの一つの作品と一人のアーティストが、見事なまでに永遠の感覚を生み出しているという事実だ。

コロンバス・ディスパッチ紙　　バーバラ・ズック



Photos by Bengt Wanselius

■「鏡と音楽」バルセロナ公演　2010年7月

ＮＹで「ミロク」公演を終えるやいなや、勅使川原三郎と佐東利穂子は、大西洋を越えてＫＡＲＡＳのメンバーたちが待つスペインのバルセロナにはいりました。グループ作品**「鏡と音楽」**を上演するためです。「鏡と音楽」は昨年の９月に東京の新国立劇場で初演された作品で、今回が初の海外公演です。バルセロナの街のほぼ中心に位置する、まだ真新しいカタルーニャ国立劇場の大ホールで７月１７日･１８日の２日間、公演を行いました。
東京の新国立劇場同様、前後２面のステージをまるごと使用し奥行きを深くした舞台に、このところ成長著しい現役高校生を含む１０代のダンサーたちがバロックの室内楽で縦横無尽に踊るいつ果てるともなく続くダンスシーンは、バルセロナの観客をすっかり魅了し、鏡の反射に照らされて背後の深い闇の中にダンサーたちがゆっくりと進んでゆくラストシーンがふっと暗転になった瞬間、一瞬の沈黙の後に会場中から感極まった絶叫に近い歓声がとどろきました。
「鏡と音楽」はまさにカタルーニャの人々の熱い情熱をかきたてたようです。観客の中には初日に来て、あまりの衝撃に２日目にも来てしまったという人が何人もいたようです。地元の批評家は「鏡と音楽」の感動を、次のように分析しました。

［記事抜粋］

この作品は私たちを触れられないものへと近づかせ、現実を超えた崇高な世界へと導いた。
美しさと比類のない洗練にあふれたバロック音楽のシーンは、この作品のクライマックスである。ダンサーたちはみな素晴らしく、様々な軌道を描いて軽やかに素速く入れかわり立ちかわり舞台に登場する。彼らの動きは猛烈な勢いで流動していくためイメージに留めることはできないが、私たちはそこに生命力にあふれた並外れた音楽を感じることができるのだ。
この作品はダンスを超えた、素晴らしく高度な知覚的体験であった。
最大級の賛辞を捧げたい。

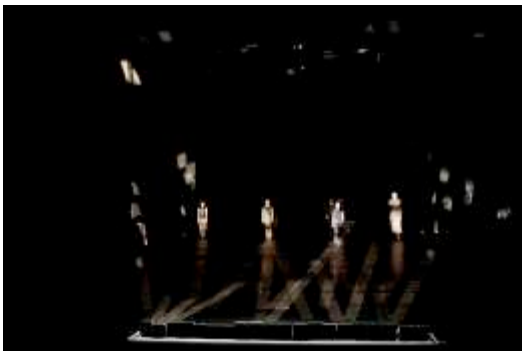
エル・ムンド紙

魔術のように魅了し、美しく想像をかきたてる。
激烈でありながらも繊細さにあふれ、素直でしかも崇高な身体芸術に、観客は感極まる想いで拍手を送った。

エル・パイス紙　カルメン・デル・ヴァル

「鏡と音楽」では脅迫的な電子音響がその気配の高まりの中で静謐さを強調し、崇高さや美と結合する。
この作品は、相反するものを捉えている。身体は音楽への回路の中でシンプルな軌跡を描き出す。それは音楽を最も忠実に映し出す鏡なのだ。

ラ・ヴァンガーディア紙　ホアキーム・ノグエロ氏



Photos by Bengt Wanselius

■南仏ラ・ロック・ダンテロン・インターナショナル・ピアノ・フェスティバルでのバッハ「パルティータ」ほかピアニストとの共演

「鏡と音楽」バルセロナ公演を大成功のうちに終えた勅使川原三郎と佐東利穂子は、他のダンサーやスタッフたちとバルセロナの空港で別れ、フランスのエクサンプロヴァンスへ移動。勅使川原が演出し来年の７月中旬に**エクサンプロヴァンス音楽祭**の野外劇場で上演を予定している**ヘンデルのオペラ「アシスとガラテア」**のミーティングが目的です。従来はこの野外劇場は高さ４メートルくらいの民家の土壁を背景にステージが設置されているのですが、そのすぐ脇に広大な美しい野原が拡がっていることに着目した勅使川原は、この大自然をまるごと背景にこの神話的なオペラを展開するアイディアを提案。現地スタッフは最初は仰天しつつも、次第に勅使川原のヴィジョンに共鳴し、この前代未聞の大きな変更を受け入れました。来年の夏はエクサンプロヴァンスで自然と人間と芸術が一体となった、壮大なスペクタクルが展開されることでしょう。この公演の詳細は、追ってお知らせいたします。

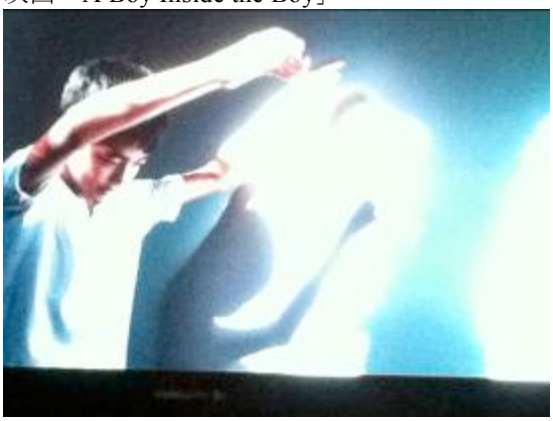
エクサンプロヴァンスから車で３０分ほど行ったところに、ラ・ロック・ダンテロンという豊かな自然に囲まれた広大な村があります。その美しい自然の真っただ中で開催されているのが**ラ・ロック・ダンテロン・インターナショナル・ピアノ・フェスティバル**です。
このフェスティバルは今年で３０周年を迎えるのですが、日本でもラ・フォル・ジュルネ音楽祭のアーティスティック・ディレクターとして知られている**ルネ・マルタン**が、２０代ではじめて手がけた音楽祭なのです。
鳥のさえずり、蝉の鳴き声、南仏の心地よい風にきらめく木の葉、そんな至福の地に、毎年、約１ヶ月間、連日日替わりで世界中からさまざまなピアニストが訪れ、演奏を繰り広げます。巨匠といわれるピアニストから新進気鋭まで、またチック・コリアやマッコイ・タイナーなどジャズピアニストの巨人たちも参加します。
実は３０年のラ・ロックの歴史の中で、ダンサーが出演するのは今回がはじめてということで、ラ・ロックの常連のピアノ・ファンにとっても驚きだったようです。この公演が実現したのは、昨年の東京のラ・フォル・ジュルネでの勅使川原が踊った**バッハの無伴奏チェロ組曲**を観たルネ・マルタンからの強い要請によるものでした。共演は日本でも人気が急上昇中の若手ピアニスト、**フランチェスコ・トリスターノ・シュリメ**。
公演は７月２５日（日）、このフェスティバル最大の野外劇場にて、ようやく空が暗くなった午後９時４０分に開演。３曲の即興とバッハのパルティータ第６番が一連の流れの中で演奏され、全体がひとつの作品のように構成されていました。
フランチェスコはバッハと現代音楽そしてジェフ・ミルズなどテクノ系アーティストのピアノ編曲を得意とする極めてユニークなピアニストで、この夜も１曲目からテクノ的なミニマル・ミュージックをガンガンぶつけてきたのに対し、勅使川原が超高速の鮮烈なダンスでこたえ観客を圧倒。次第にゆるやかな曲調に変化し２曲目に移行。南仏の風を描いたかのようなアンビエントな曲で、佐東利穂子が空気に溶けいるような動きで観客を魅了し、続く３曲目ではフランチェスコがピアノの内部奏法を駆使した現代的な音色を響かせたのち、そのままバッハのパルティータへ。勅使川原と佐東はパルティータ第６番の７曲をデュオで踊り、男女の出会いや擦れ違い、情愛や葛藤を精巧なダンス技法を駆使して自在に描きだし、深い感動を生み出しました。
普段とはかなり異なった客層でしたのでどんな反応になるか興味深かったのですが、カーテンコールでは通常のダンス公演と同様、拍手が鳴りやまず、出演者が登場するたびに絶叫に近い歓声が巻き起こり、最後はフランス独特の足を踏み鳴らす音が会場中に響きわたる騒然とした雰囲気の中で公演が終了しました。
終演後の打ち上げでは、「これからも芸術の革命を共に巻き起こしていこう!」と、ルネ・マルタンと勅使川原はすっかり意気投合。
この公演の観客席には、ヨーロッパ各国のダンス・フェスティバルのプロデューサーも来ていたようで、帰国した後、再演のオファーが次々に入ってきました。日本でも近い将来上演できればと思っています。

Photo by Xavier Antoinet

■イタリア　チヴィタノーヴァにおける映画撮影と新作公演

南仏の風の中でのバッハのダンスを大成功のうちに終えた勅使川原三郎と佐東利穂子は今度は一路、中央イタリア、アドリア海沿いの小さな村**チヴィタノーヴァ**へ向かいました。
２００４年**「GREEN」**、２００７年**「Black Water」**の２度の公演でこの地を訪れた勅使川原は、この石畳の広場と、遠くオリーブ畑を望む坂道と、いつも同じ顔ぶれのオヤジたちがカードに興じているカフェと、精神病院、そして小さなオペラハウスがあるこのお伽噺に出てきそうな村を大いに気に入り、今回はこの村に２週間滞在して**映画「A Boy Inside the Boy」**を撮影し、**同じタイトルの新作ダンス公演**を開催することになったのです。
映画は、少年が異界に紛れ込み、未来の自分と出会うという内容で、勅使川原が監督する６本目の短編映画になります。主な出演者は中学生の少年、ＫＡＲＡＳのダンサーでもある高校生の青年、佐東利穂子の３人。カメラは巨匠ベルイマンのスティルカメラマンで、近年勅使川原のダンス作品を撮影し続けているベングド・ヴァンセリウスがスウェーデンから参加。撮影隊は連日、ラファエロやピエロ・デ・ラ・フランチェスカが展示されている古城の美術館や歴代のゴーストたちが住んでいそうな貴族の邸宅の鏡の部屋、真っ青な空の下のオリーブ畑やワインヤード、早朝の海辺や月下の坂道、土砂降りの広場や修道院の屋根の上、そして観客席が２００席しかない秘密の小箱のようなオペラハウスなどを駆け巡り、次々に奇跡的な映像をものにしていきました。
撮影の最終段階の８月７日、**ダンス版「A Boy Inside the Boy」**を２００席のオペラハウス、アニバル・カーロ劇場にて上演。２００人しか観ることができない１度限りのこの特別な公演は、小規模ながらチヴィタノーヴァ・ダンス・フェスティバルのハイライトとして開催されたもので（フェスティバルのチラシやポスター、パンフレット、街の壁に貼付された巨大な広告には佐東利穂子が草原を駆ける姿がメインビジュアルとして使用されていました）、イタリア各地から駆けつけたダンス･ファンや評論家、プロデューサーが席を埋めていました。
作品は全篇リゲティのピアノ・エチュードの曲のみで構成され、硬質で緻密なダンスと記憶の裏側をたどるような幽玄な情景が交錯し、いくつもの時間軸が重なり合いながら静けさの中で不可思議な物語をつむぎだしていく、そんな、近年の勅使川原の作品の中でもかなり異色で特別な感触をもった作品に仕上がりました。カーテンコールではいつまでも拍手が続き、客電がついた後もその場を立ち去れず、真剣な顔で作品について語り合う観客たちの姿がありました。
この作品が、次の新作**「SKINNERS – 揮発するものへ捧げる」**へ、どのように変容しながらつながっていくのか、とても楽しみです。

映画「A Boy Inside the Boy」



映画「A Boy Inside the Boy」撮影風景

アニバル・カーロ劇場

Photo by Allyson Way Wanselius

ダンス版「A Boy Inside the Boy」

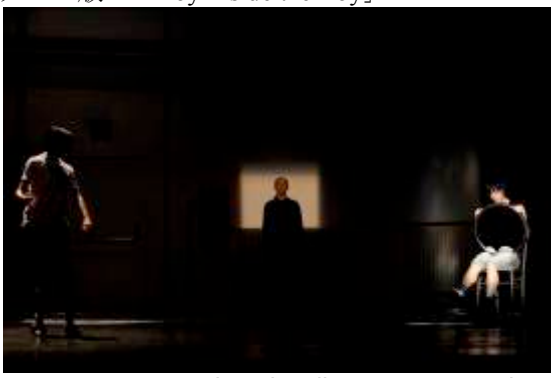


Photo by Allyson Way Wanselius

■今後の予定

長い旅から帰国した勅使川原三郎は、現在、次のような活動に取り組んでおります。

◎　１１月下旬に東京で開催されるフェスティバル/トーキョーでの新作**「SKINNERS – 揮発するものへ捧げる」**のリハーサル
◎　**映画「A Boy Inside the Boy」**の日本国内での撮影および編集
◎　来年エクサンプロヴァンスで開催する**ヘンデルのオペラ「アシスとガラテア」**の衣装や装置デザイン
◎　１１月中旬にフランスで開催する現代音楽の作曲家**カンチェリの交響曲第6番のオーケストラとの共演**のためのリハーサル
◎　近い将来の設立を構想している**ダンスと音楽のインスティテュート(研究所)**に向けての準備
◎　勅使川原の**ダンス・メソッドを編纂した書籍**の準備

「SKINNERS – 揮発するものへ捧げる」は、１１月２７日と２８日、池袋の東京芸術劇場での公演です。
詳細は別紙のとおりです。勅使川原のダンスがリゲティの超絶的な楽曲と出会うことによって、新たな美の衝撃が生み出されることでしょう。また勅使川原と佐東の研ぎ澄まされたダンスはもとより、「鏡と音楽」バルセロナ公演でも大活躍した１０代のダンサーたちの目覚しく成長した姿にも、ご注目ください。

映画「A Boy Inside the Boy」は、現在、東京藝術大学大学院映像研究科の教授、OB、学生たちの協力を得て、撮影、編集を進めています。来年夏に完成の予定です。公開時期や場所など詳細が決まりましたら、追ってお知らせいたします。

勅使川原三郎が演出する**ヘンデルのオペラ「アシスとガラテア」**は、来年７月９～１９日にエクサンプロヴァンスのグラン・サン・ジャン劇場で上演されます。

ギア・カンチェリはグルジア出身の今年７５歳になる作曲家で、彼の楽曲はスピリチュアルな性格が強く、クレーメルやロストロポーヴィチ、バシュメットやカシュカシャンなど、一流の演奏家たちから尊敬されている作曲家です。今回の公演は、ロシア国立交響楽団からの依頼で実現することになったもので、フランスのル・アーヴルで１１月１２日に、ルーアンで１１月１４日にマルク・ゴレンスタイン指揮、ロシア国立交響楽団の演奏で公演が予定されています。勅使川原にとっても今回がオーケストラとの初共演になります。この公演の模様は追ってレポートさせていただきます。

勅使川原が今後、ライフワークとして取り組んでいきたいと考えているプロジェクトが、**10代の若者を対象としたインスティテュート(研究所)の設立**です。勅使川原はこれまで呼吸と身体の関係に基づいた普遍的な身体メソッドを探求し、パリ・オペラ座バレエ団やフランクフルト･バレエなど世界でも有数のダンス・カンパニーでのワークショップや、ロンドンでの１年間にわたる教育プロジェクト、ローレックスが主催する若手芸術家育成支援事業などさまざまな教育プロジェクトで大きな成果をあげてきましたが、２００８年、１０代の少年少女を対象にした１年間にわたるワークショップと作品創造に取り組んだ結果、勅使川原は１０代のうちに身体感覚を磨き、高度な技術を習得することの重要性を痛感しました。そして、このたび１０代の若者を対象としたインスティテュート(研究所)の設立に向けて、本格的に動き始めたのです。そして同時に、これまで探求してきた身体メソッドを編纂した書籍の準備を開始しました。この件に関しましては、今後も折をみてお知らせしていきたいと思います。